
2009 年度支部横断企画傍聴記

「電子音響音楽シンポジウム&コンサート2009」に参加して

加藤いつみ

2009年5月9日(日)愛知県芸術劇場小ホールにて、日本音楽学会と日本電子音楽協会の協賛で「電子音響音楽の今日的状況」というテーマに基づいたシンポジウム&コンサートが開催された。この企画は、日本音楽学会「支部横断企画」2008年度の助成と財団法人ローム・ミュージック・ファンデーションの助成を受けて開催されたものである。

全体は大きく二部に分かれていた。第一部は、四名のパネリストを中心にしたシンポジウム、第二部はコンサートで、世界17ヶ国41名の中から選ばれた8人の作品、そして当日のパネリストの作品が披露された。シンポジウムとコンサートを含めて6時間に及ぶ長い企画であった。

第一部は、コーディネーターを務めた水野みか子氏(名古屋市立大学)の司会で、各パネリストの紹介から始まった。作曲家・音楽学者であるマルク・バティエ(ソルボンヌ・パリ第4大学)、作曲家・岩崎真(東京芸術大学)、音楽学者・沼野雄司(桐朋学園大学)、音楽情報処理・小坂直敏(東京電機大学)の四氏が今回のパネリストであった。

ソルボンヌ大学教授であり、電子音響音楽の作曲家であるマルク・バティエ氏は、電子音楽が生まれ、そして今日までの経緯について話された。それによると、20世紀初期の蓄音器を使った録音技術、20世紀中期のラジオによる放送技術、そして電気や電子を通して人工音による電子音楽が辿った過程について述べられた。それによると、初期の芸術家は、蓄音器によって音楽組織の中にあらゆる音——“声”“自然音”、“産業社会の音”——が録音できるのではないかと夢見た。フランスの詩人ギョーム・アポリネールは1912頃、バイエルン王ルードヴィッヒの不思議な人生を描いた『月の王』という小説のなかに、王の部屋で数種類の方法で採録した音を、その朗読の中に蓄音器を用いて録音した。彼は、これを「世界交響曲」と名づけた。上記の他にも、詩人や音楽家の中には、自然音であれ、騒音であれ、産業音であれ、耳に出来る音の全てを取り入れようという欲望が高まった。20世紀の芸術家は、自身の記憶にある音のみならず、これらの音を<新しい素材>として音楽の中に用いたり、レコードの断片をつなぎ合わせて一つの音楽を作ったり、技術革新に支えられて以前には想像もできなかった領域まで発展させた。

電子音響音楽は、1948年、ピエール・シュフェールが仕事をしていたパリの放送局スタジオで初めて公式に始まった。彼は、いろいろな音や、“ノイズ”を集めて五つの作品を発表した。また、1952年オリビエ・メシアンは、パリで15分のテープ作品「Timbres-durs」を発表し、新たな電子音楽の方向を示した。1950年代にかけて、特別なスタジオが作られ、ケルン、ニューヨーク、東京など、ほどなく世界のあちらこちらで電子音響音楽の創作が始まった。パリでは「ミュージック・コンクレート」

や「正統複写音楽」と呼ばれていたが、1950年代には「電子音響音楽」、1960年代には「コンピュータ音楽」など新しい呼称が生まれた。そして2000年に入った動きとしては、東アジアの音楽情報を世界に発信するための学会、EMSAN という国際学会が立ち上がり、電子音響学者が毎年集い、討論するというネットワークが作られた。

今日の電子音響音楽を知るためには、過去の変遷、多くの様式その豊かさを把握することなくして今日の電子音響音楽について語ることは出来ない。間違っ理解された過去とよき未来の過渡期にあるのが今回のテーマである「電子音響音楽の今日状況」であり、60年の歴史を経てやっと新たな研究領域として音楽学の中に取り上げられる時期になってきた、と述べた。

二番目のパネリストの岩崎真氏は、日本における電子音楽の発足とその歩みについて講演された。電子音楽の作曲家、研究者、技術者は、電子音楽が生まれた当時の夢を21世紀に広げるために1992年に「日本電子音楽協会」設立させ、第一回目のコンサートを1992年に東京十字屋ホールで開催するなど、さまざまな専門分野の交流を通して、日々刷新されるテクノロジーと音楽、芸術の新しい関係を社会に提供していく場として活動を繰り広げている旨の報告があった。

三番目のパネリストの沼野雄司氏は、電子音楽には門外漢であり、今まで接点なかったことを断わった上で、電子音響音楽は、現代音楽とは異なったものである、という見解を述べた。1970年頃を境に現代音楽がゆきづまり、この衰退と軌を一にするかのように電子音響音楽の可能性と領域は進化を続け、そして今日においては、音楽学の中に新しい領域として研究対象になるほどに台頭してきた。しかし一方、現代音楽の作曲家は、依然として“楽音”を用いて作曲している者が多く、電子音響音楽にあまり真剣に取り組んでこなかったのではなかろうか。メシアン電子音響音楽の作品でさえ、最近再現されることも稀であり、永続的に残るものではなく、人々の一時的な関心が過ぎれば忘れられてしまうものではなかろうか、と考える人も多いことを示唆した。沼野氏自身がこの種の音楽に関心を示してこなかった事実を認めながらも、今回のレポジュームを契機に電子音響音楽について考えてみたいと結んだ。

四番目のパネリストの小坂直敏氏は、その音楽を譜面化する方法とユーザーの意図する音色を分かりやすくするためのシステムとして、「電子音色辞書」を構築している話から始まった。現在のコンピューター音楽は、コンピュータープログラム、操作法の記述はできるが、聞こえたものを書き取ることがうまく機能していないので、作曲家が残した譜面を見て演奏家が作品を再現しにくい。残されたCDを再生すること、およびプログラムを駆動して再現することしか出来ず、他者に演奏意図は反映されにくい。聞こえてくる音楽の記述ができれば、第三者が演奏することも可能となる。これらの欠点を補うために、音色を記号で表す電子音色辞書の開発を進めている旨の話があった。

第二部のコンサートは、18:30分より始まった。公募で選ばれたイギリス、イラン、フランスなど8ヶ国の人の作品が、それぞれ10分程度真っ暗な中から流れてきた。演奏者の居ない舞台に作曲者名とタイトルのみが順に表示され、一曲終わって“拍手”

すべきか戸惑った。電子音によって作曲された曲は、国民性を表わしているというよりは、それぞれ作曲者の持つ個性と創意に満ち溢れていた。続いて、ステージが明るくなり今日のパネリストであるマルク・バティエ氏、小坂直敏氏、水野みか子氏ら 8 名の作品が披露された。ここからは、電子音楽をバックにしてソリストがステージ上で生演奏を行った。

バティエ氏の作品『都鳥』は、在原業平の「伊勢物語」から題材がとられてもので、舞台の中央に和装した尺八奏者・野村峰山（都山流）が立ち、尺八を奏でた。特に美しい旋律を奏するわけではないが、明るいステージ上に人が居て、バックの電子音楽と呼応した動きや音があり、生の音に直接触れることができ、ほっとした安らぎを感じた。心なしか聴衆の間からも同じような反応が伝わってくるのが感じられた。私は感覚が古いのか、演奏している姿が見え、むつかしさ、優しさなどの表現を通して音楽の喜びが共有できるのがコンサートだと考えていた。電子音響音楽は、現代音楽の一部であることは、十分に理解できたが、ステージの上での奏者による音楽の感動を共有に出来ないことに対する物足りなさを覚えたのは、私だけでないように感じた。マルク・バティエ氏が述べているように電子音響音楽は、＜台頭する音楽学の新領域＞になりつつあることを認識し、また、沼野氏の言うように、その音楽は身近なところに存在していることを十分に理解した上で、今後知識と関心を寄せていかなければならない領域である、と考えさせられた。